

「国富・綾 想いをつなぐバトン」 ～心得～（第1版）

1、はじめに

人は、いつ、どのような状況になるかわかりません。もしもの時、自分の想いが伝えられているか？支援、ケアを提供する側の私たちができることはないか？そういう背景のもと、令和6年より東諸県医療介護連携合同研修会実行委員では、「自分の想いを自分の言葉で残し、関わる人が変わっても想いがつながっていく」そんな共通様式ができないか？という思いで、検討を繰り返し本ツールを作成するに至りました。このツールは一度に完成させるものではなく、関わりの中で語られたその人の言葉を残し、次の支援者へと引き継ぎ、また、次の関わりで語られた新たな言葉を紡いでいくためのツールになります。

2、 目的

このツールは人生の最終段階の医療やケアを決めるために「結論」を出すことを目的にするものではありません。

その人がこれまで生きてきた道、大切にしてきたこと、喜びや後悔、迷いを含めた想いを安心して語れる時間を作りその語りに寄り添い、療養の場が変わってもこれから関わる人たちがつないでいくことを目的とします。（このツールは利用者、家族に開示するものではなく事業所間共有を目的とします。）

※情報の取り扱いについて

- ・個人情報の同意取得に関して、情報収集にあたり本人・家族からの同意は不可欠であるが、各事業所が契約時に取得している既存の個人情報同意書の範囲内で、関係機関との情報共有の一環として、本ツールを取り扱うこととします。
- ・第1版はエクセルデータにパスワードを設定し共有する方法とするが、今後MCS（メディカルケアステーション）の活用も視野に入れシステム管理を行っていく予定。

※ファイル名、パスワードについて（個人情報になるため個人名はつけない）

ファイル名： 被保険者番号 パスワード： 生年月日（西暦/月/日 例： 19700401 ）

3、 聞き手（私）の基本姿勢

私たちは「評価者」や「判断する人」ではなく語りに寄り添う伴走者です。

正解、不正解はありません。話の内容が変わっても、揺れても、そのままの言葉を大切にします。

話さない。話したくないという選択も尊重しましょう。

「聴こうとする姿勢」そのものが、その人の人生を大切にする関わりです。

4、聞き取りを始める前の場づくり

特別な面談の場でなくても構いません。日常の落ち着いた時間を大切にしてください。記入する事を目的にせず、まずは会話を大切に雑談や日常会話から始めてみませんか？何気ない会話からその人の想いがこぼれてきます。

5、問いかけ

質問は答えを引き出すためではなく、語りが始まるきっかけになります。

「はい」「いいえ」で終わらないような「問い」を意識しましょう。

すべてを聞く必要はありません。その時、話したいことを話してもらいましょう。

(質問例)

「子供の頃はどんな遊びが好きでしたか？」

「(自分の)お父さん、お母さんはどんな方でしたか？印象に残っている思い出はありますか？」

⇒ 生い立ち、育った環境が語られていきます。

「一番大切にしている宝物はなにですか？」

「幸せを感じる時、うれしかった事、悲しかった事、不安な事、心配なことはありますか？」

⇒ 価値観、財産につながっていきます。

「叶えられなかった夢はありますか？」「会いたい人はいますか？」

「人生の目標はありますか？」「これだけは譲れない想いはありますか？」

⇒ 夢・希望、人間関係、信条など大切に引き継いでおくべき情報が出てきます。

6、記録について

本人の言葉でできるだけそのまま記載します。解釈や評価、聞き手の考えは書きません。

後から想いが変わった場合や新たな話も出てきます。その時は追記していきます。

このツールには完成はありません。次の関わり手へのバトンです。

その時その時を積み重ねていくことが大事です。

【書き方】 (記載例を参照してください)

- ・年表(年代)で起こったことを項目の欄に記載していきます
- ・項目は、その方のエピソードに合わせて記載している項目以外に変更しても構いません。
- ・担当者欄には番号があります。記入の際には誰が記入した記事なのか？わかるように番号を付けていきましょう。
- ・記事は番号(①②)を振り誰が書いた記事なのかわかるように記載します。その人の言葉で記載していきましょう
- ・一日のスケジュールは聞き取りを行った時期の日課を記載することで在宅ではどのような一日を送っていたのかがわかります。
- ・記入者の感想には記入者の想い、伝えたいことを記載します。

7、 関わる人同士でつなぐために

職種や立場に関わらず、その時に語られた想いを大切にしてください。一人で背負わずチームで共有します。その人の語りが次の関わりにつながっていくことを意識します。

8、 最後に

うまく聞けなくてもかまいません。

話が広がらなくてもかまいません。

「この人の人生を大切にしたい」という気持ちで向き合うことが、その先のACPへつながる最初の一步へとなるのです。

このツールを通して、たとえ自身で想いを伝えられなくなったとしても、その人らしい最期を迎えるためにこれまで出会い、関わってきた介護・医療のスタッフや家族がその想いを大切に受け継ぎ、伝えていくことができるよう、優しく寄り添い続けるための一助となることができれば幸いです。

令和8年 3月13日

東諸県在宅医療介護合同研修会実行委員